

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月15日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2008～2011

課題番号：20251007

研究課題名（和文） フェニキア・カルタゴ考古学から見た古代の東地中海

研究課題名（英文） Ancient East Mediterranean from the Viewpoint of Phoenician and Punic Archaeology

研究代表者

泉 拓良 (IZUMI TAKURA)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30108964

研究成果の概要（和文）：フェニキア・カルタゴの歴史について考古学的な視点から啓蒙的な活動ができた。京都大学総合博物館「呪いの鉛板」展はその成果である。フェニキアの本拠地ティール郊外でヘレニズム～ローマ時代の竪穴墓と地下墓を発掘し、フェニキア文化の本質と深く関わる「都市と郊外の関係」について大きな成果を得て、チュニジアでの国際学会で発表した。リビア・チュニジア・シチリアの踏査で、考古学からみたフェニキア文化とカルタゴ的在地化についての見識を得た。

研究成果の概要（英文）：We can illuminate the history of Phoenicia and Cartage under the viewpoint of archaeology. One of the examples is The Special Exhibition of the Kyoto University Museum “Curse Tablet from Tyre in Lebanon”. At the local area of Tyre where used to be the most famous city of Phoenicia, we excavated shaft-tombs and hypogea of Hellenistic age to Roma Age, and we could get the important evidences of the intimate relationships of Tyros City and its local area. We believe that these relationships are the essentiality of Phoenician culture. We presented the results of our excavations in Lebanon on the VIIth International Congress of Phoenician and Punic Studies. And we surveyed Sicilia, Libya and Tunisia, and we became to recognize several evidences of the differences of Phoenician culture and Punic culture.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	6,800,000	2,040,000	8,840,000
2009年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
2010年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
2011年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
年度			
総計	23,100,000	6,930,000	30,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：地中海、フェニキア、カルタゴ、地下墓、縦穴(シャフト)墓、ヘレニズム時代、ローマ時代、呪詛鉛板

1. 研究開始当初の背景

(1) 文明を考える時、メソポタミア文明・

エジプト文明とギリシア・ローマ文明を浮かべ、その違いを知る人は多いが、その間に大

きな時間的断絶があることは知る人は少ない。フェニキア・カルタゴはその時間の谷間であって、両文明をつなぐ重要な文化・文明である。しかし、その研究はきわめて少ない文献資料、それも当時の敵方であるギリシアやローマの文献に依った研究である。

(2) フェニキアに関する考古資料は、その中心がレバノンにあるが為に、1972年以來継続的に内戦状態にあった影響で、ほとんど資料が得られていなかった。

(3) 1995年以降、内戦の終結が現実になり、国際的な協力によりレバノンでの考古学的調査が再開され、首都ベイルートの再開発に伴う発掘調査では、フェニキア鉄器時代のベリートゥスの城壁が発見され、都市の規模が判明するとともに、土器編年が進められた。

(4) 1999年から代表者の泉拓良は内戦後復興の考古学的踏査に参加してきた。この努力により、レバノンでの発掘調査の許可が日本隊におり、フェニキアの考古学的調査が可能となった。

(5) フェニキアにおいて重要なのは、フェニキアと呼ばれている文化を担った人が誰であり、地域ないし都市が何を指すのかである。フェニキアの都市は概して小規模であり、内陸部に大きな都市は無い。では、都市に住む人と郊外に住む人とは、どのような違いがあり、その間には如何なる関係があり、海外へと進出した人々はそのどの部分であったのであろうか。その実態はギリシアとは違い、全く判っていない。

(6) フェニキアが歴史的に重要な役割を担った地中海での文明の交代において、重要な役割を担ったのが、地中海中部で最初は交易の中継地としての役割を持ち、後に西地中海で中心的な国家となったカルタゴである。すなわち必ずしも対応しないフェニキアの盛衰とその植民都市カルタゴの繁栄の関係を明らかにする期待が生じていた。

2. 研究の目的

(1) 考古学的視点からフェニキア系土器の拡散を、時間的、空間的に明らかにする。

(2) フェニキア起源の習俗、特に、文化的に不整合である埋葬習慣(火葬等)や建築構造や都市構造の研究から、その広がりについて、考古学的な証拠を明らかにする。

(3) フェニキア都市にはほとんど見られない地下墓の発掘調査を、都市周辺でおこない、その偏在の理由を明らかにできる具体的な資料を収集する。フェニキア鉄器時代の地下

墓を調査する希望があるが、ヘレニズム～ローマ時代の地下墓も同様のことを指摘できるので、発掘する地下墓の時代は問わない。

(4) それにより、都市と周辺の違いが身分差や家系等の差なのか、職業の差なのかというような背景を明らかにして、「フェニキア」と意識されていた範囲が都市部に限られるのか、周辺部を含んでいるのかを明らかにする。

(5) 北アフリカ地域での遺跡踏査をおこない、都市の範囲の変遷を明らかにし、植民都市時代のフェニキアとカルタゴの都市構造についての比較をおこない、その系譜を明らかにする。

(6) 都市構造の比較をおこなうことにより、ギリシア植民都市との具体的な違いを明らかにし、年代的な問題とその背景にあるフェニキアとギリシアの社会的・文化的な相違を射程に入れたまとめをおこなう。

3. 研究の方法

(1) レバノンにおける考古学的調査。フェニキアの中心都市古代のテュロス、現在のティールの周辺で地下墓の発掘調査をおこない、地下墓に関する確実に豊富な資料を入手し、都市の墓(家屋墓・石棺墓)との比較をおこなう。

(2) 出土した遺物の比較研究により、都市と周辺に葬られた人の貧富の差や階級差、宗教の違い等を考察する。

(3) 都市と周辺とに共通する碑文や壁画の収集をおこない、そこに表現される文化的諸属性や身分や職種の違いを明らかにする。

(4) 日本では入手不可能な発掘調査報告書等、最新の情報の収集を来ない、フェニキア本土と植民都市をつなぐ遺物や遺構を集成する。

(5) 北アフリカ・シチリア(古代カルタゴ地域)での遺跡踏査。この地域でのフェニキア、カルタゴ遺跡の実態を踏査により明らかにする。特に、リビアの遺跡情報は日本にはほとんど知られておらず、その実態を明らかにしたい。

(6) レバノンで明らかになってきたフェニキア都市の実態と比較するため、現地調査と画像解析から、現存するローマ時代やカルタゴ時代の遺構に隠されて判らなくなっている、植民当初のフェニキア的な都市の規模を明らかにする。

(7) フェニキアに特徴的な石壁の築造法(石柱礫積み、アフリカ積み)に注目し、その資料を収集する。

(8) フェニキアとカルタゴにまたがる習俗・宗教的遺物として、ステラとタニット女神記号に着目し、その変遷からフェニキアとカルタゴの関係の変遷を明らかにする。

4. 研究成果

(1) ティール市郊外ラマリ遺跡での発掘調査では、地下墓 TJ10、縦穴(シャフト)墓 TJ08-A、TJ08-B、建物基礎の可能性のある石列 XJ09 を発見し、発掘をおこなった。調査をおこなった順に以下に記述する。

① 石列 XJ09 はヘレニズム時代後半の遺構で、2003年の調査で検出したタニット女神記号付き鉛製分銅が出土した性格不明の土坑 XJ06 とつながる。出土したアンフォラの把手にスタンプのあるものがあり、ロードス産とクニドス産のアンフォラが識別できた。形態から現地テュロス産のアンフォラも識別できた。赤色地彩文のフラスコも出土している。

② 縦穴(シャフト)墓 TJ08-A、B は、南北に並んで作られた墓で、縦穴開口部は A 墓と B 墓とも西に作られ、東側の地下部に墓室が掘られていた。縦穴部の大きさはほぼ同じであったが、墓室は A 墓の長さが 1.7m であったのに対し B 墓は 2.2m と長く、夫婦墓の可能性を指摘できる。両墓ともほぼ完全に盗掘されており、木棺に使用されていたと考える鉄釘が数点出土しただけであった。同様の縦穴墓が 2002 年の調査で 3 基出土しており、その出土遺物から紀元後 1 世紀頃と考えられる。これまでにこの型式の縦穴墓は報告されたことは無く、フェニキア伝統の墓として注目できる。

③ 地下墓 TJ10 は、何回にもわたる増築がおこなわれた痕跡があり、南北 12.5m、東西 14.5m をはかるこの地域で最大級の地下墓である。多くの埋葬施設、墓室やロクルス、墓壙、テラコッタ棺などが出土している。出土遺物からみて、建造された時期は 1 世紀末で、数回の増築を経て 3 世紀までは墓として使用されており、4 世紀まで開口していた可能性が指摘できる。特徴的な出土遺物としては、ギリシア語で呪詛文の書かれた鉛板(呪詛板)と、ディオニュソス土製マスクがほぼ完形に復元できる 2 面を含め破片ではあるが 6 面以上が出土している。呪詛板は④で別に説明する。ディオニュソスないしその信女を描いた複数の石棺がテュロス都市部の墓地(アル・バース地区)から出土しており、また、同じアル・バースの石館内からディオニュソス土製マスクが出土している。年代は 2-4 世紀といわれており、年代を絞ることはできないが、都市部、周辺部の区別無く、帝政ロー

マ時代後半に葬祭と結びつくディオニュソス信仰が広まっていたことが判る。

④ TJ10 墓から出土した通常の遺物としてランプをあげることができる。テュロス都市部出土のランプに関する研究は、アル・バース地区にあるアポロ神殿の発掘調査報告書に掲載されている。それとの比較をおこない、系統的に微妙な違いが認められることを明らかにした。この違いを、都市部におけるローマ的属性、周辺部における在地性と結びつけることは可能であるが、それが生活の質を反映していると考えられるのか、使用法の違いと考えるのかは現時点では決めがたい。

⑤ 呪詛板はレバノンでも数多く発見されてはいるが、開いて解読された例の報告は無く、今回がレバノンで初めての試みである。呪詛板は青白い鉛製で、発見時には巻かれた状態であったが、それを展開すると長さ 14.7cm、幅 6.0cm の板状になり、そこに約 1,100 文字のギリシア文字が記号群を含めて、54 行にわたってびっしりと刻まれていた。製作年代は 2 世紀末から 4 世紀の一時点であろうが、呪詛板の性格から見て墓が機能していた 3 世紀の可能性が高い。書かれていた呪詛文の内容は、呪詛者である農場の監督者と農場で彼が使用した牛追い達との間で起こった金銭トラブルによる訴訟に関する呪詛である。呪詛者は、キリスト教グノーシス主義に接していた可能性も指摘できる。当初の研究目的として注目するのは、農場の監督者や牛追いは都市部から出土する碑文には見られない職業であり、周辺部の特徴を示していると思われる点である。

⑥ このような成果から、都市部と周辺部との違いが徐々にではあるが明らかになった。両地域では通常の住民同士での貧富の差や宗教的な差は認められないが、職業的な差は顕著なようである。都市部に商工漁民の集住と埋葬が認められるのに対して、周辺部には農牧民の墓が形成されたと考えられる。

(2) 壁画の調査では、多くの題材に都市部の石棺墓と周辺の地下墓とに共通点があり、思想的な違いが、地域によって異なることは認められなかった。

(3) リビアのサブラータ遺跡、レプティス・マグナ遺跡では、現存するローマ時代の街路の乱れる所がカルタゴ時代の遺物の出土する地点であり、かつ岩盤の露出の見られるところという共通性があり、径 200-300m の比較的小規模の植民都市が推定できた。また、チュニジアでは、ローマ時代には廃絶していたカルタゴ郊外のケルクワン遺跡の規模が径 220m である。ウティカも同様に当時の海岸に面した小規模都市のようであるが、カルタゴは例外的に大きく、1km を越える規

模と推定している。海岸に接し岩盤・岩礁上に形成された小規模な港湾都市はペイルートやテュロスのフェニキア時代都市に共通する特徴であり、フェニキアとその植民都市に共通する。

(4) カルタゴで特徴的といわれる石壁の構築法に、整形された石柱を等間隔に立て、その間に小型礫を詰め込む「石柱礫積み」法がある。フェニキア本土ではサレプタ遺跡、ペイルート、テュロスで発見されており、紀元前9世紀に遡るといふ。新石器時代の例も指摘できるが、北アフリカやポンペイに見られるこの種の技法は、直接的にはフェニキア起源と考えられるであろう。

(5) フェニキアとカルタゴの双方に認められる特徴的な習俗と関わる遺物として墓標や奉納碑と考えられるステラと、そこに描かれることの多いタニット女神記号を集成した。ステラの基本はエジプトからの影響であるが、最も古い石柱形、屋根に円形浮文のあるナオス神殿形のステラは、テュロス出土例が紀元前9世紀頃と最も古く、アंकに類似したタニット女神記号の祖型もこの時期の石柱状ステラに刻まれている。エジプト形ナオス神殿形ステラがカルタゴの流行し始めるのは、紀元前5世紀からであり、ほぼ同時に本格的にタニット女神記号がカルタゴに出現する。

シチリアでギリシア植民都市との力関係が逆転する前4世紀にはカルタゴのステラにギリシア風の神殿が描かれ、タニット記号がアंकのように神官の手に握られる図案も登場し、カルタゴでのタニット女神記号の普及が進む。すなわち、フェニキアとカルタゴの関係は、フェニキア本土の状況とエジプトの関係に始まり、フェニキアの主体性の崩壊後は、ギリシア植民都市との関係でカルタゴの文物の変化を理解できることが明らかになった。

(6) このような成果について、2009年にチュニジアで開催された第7回国際フェニキア・カルタゴ考古学会で発表をおこなった。

(7) 最終年度の2011年には、国士舘大学アジア・日本文化センター活動プログラム、弘前大学人文学部文化財論講座講演会と共催して国際講演会・研究討論会を開催した。海外からは、イタリア・パレルモ大学のジョアキーノ・ファルソーネ教授、ドイツ・エーベルハード・カールズ大学パオラ・スコント博士課程研究員、レバノン大学ハッサン・バダウィ助教授、レバノン考古総局ナードル・シクラウィ調査官が参加し、研究発表と討論をおこなった。チュニジア国立文化遺産

研究所調査部長アハメッド・フェルジャウイ氏も参加予定であったが、「アラブの春」の余波で直前にキャンセルとなった。講演会・研究討論会の成果は研究成果報告書にまとめた。

(8) このような研究は、わが国にフェニキア・カルタゴの考古学を広く一般にも広める結果となった。以上述べてきたように、個々の研究により当初の目的は達成されたと考えている。総合的には、フェニキアとは沿岸部に都市を築いた一部の「フェニキア人」とそこに住む住民であり、その周辺で農牧業を営んでいた人たちを含んでいず、海外に進出したのも、この沿岸部の都市に限定されていたと考えられ、その性格は当初は植民都市でも引き継がれていたと考えられる。このような都市と周辺の関係は、ヘレニズム時代、ローマ時代にまで残存していた可能性を指摘できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 佐藤育子「紀元前一千年紀におけるフェニキアの海外発展—宗教的側面を中心に—」、査読有、『古代オリエント博物館研究紀要』vol. 29/30、2011年、65-78頁
- ② 泉拓良、辻村純代、前野弘志「フェニキア・ヘレニズム～ローマ時代の墓制の研究—レバノン、ラマリ遺跡ローマ時代地下墓TJ10の発掘調査2010」、『平成22年度考古学が語る古代オリエント 第18回西アジア発掘調査報告会報告集』、査読無、2011年、130-135頁
- ③ 泉拓良、辻村純代、「フェニキアのネクロポリス—レバノン・ラマリ遺跡の発掘調査—」『平成21年度考古学が語る古代オリエント 第17回西アジア発掘調査報告会報告集』、査読無、2010年、124-129頁
- ④ 宮坂朋「ローマのヘルクレス/ヘラクレス」『第16回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』査読無、2010年、76-77頁
- ⑤ 宮坂朋「半開き扉—ヴィア・ラティーナ・カタコンベ墓室F壁画画像解釈—」、査読有、『美術史』66、2009年、397-410頁
- ⑥ 南川高志「ハンガリーのローマ帝国—ブダペスト市内のローマ遺跡について」、査読有、『西洋古代史研究』8、2008年、23-41頁

〔学会発表〕(計34件)

- ① 泉拓良、他8名「フェニキア・カルタゴ考古学から見た古代の地中海」、京都大学

- 国際講演会・研究討論会、11月19・20日、京都大学吉田キャンパス
- ② 泉拓良、他6名「ローマ時代のフェニキアとカルタゴ」、弘前大学人文学部文化財論講座国際講演会、2011年11月15・16日、弘前大学文京キャンパス
- ③ 泉拓良、他6名「フェニキア考古学から見た古代オリエント」、公開講演会「地中海地域フェニキア・カルタゴ遺跡の最近の発掘成果」、2011年11月12・13日、国土舘大学世田谷キャンパス
- ④ 岡田保良「ヘレニズム-ローマ期における石造組積術 — メッセネとティールとガダラ」第18回ヘレニズム・イスラーム考古学研究会、2011年7月3日、榎原考古学研究所
- ⑤ 前野弘志「2010年にティール郊外で出土した呪詛板に関する予備的考察」三田史学、2011年6月18日、慶應義塾大学
- ⑥ 奥山広規「碑文における字形分析から何を言えるのか - 東地中海地方都市ティール出土碑文を事例に -」、第16回ワークショップ西洋史・大阪、2011年5月28日、大阪大学
- ⑦ Takura Izumi, Sumiyo Tsujimura, Tomo Miyasaka、他1名、”The Preliminary Report of Excavation at Ramali, in Tyre”、VII^{ème} congrès international des études phéniciennes et puniques、2009年11月11日、Hammamet, Tunisia

〔図書〕(計5件)

- ① 泉拓良、南川高志、岡田保良、小方登、辻村純代、宮坂朋、佐藤育子、他、京都大学大学院文学研究科『平成21~23年度科学研究費補助金 基盤研究(A)研究成果報告書(課題番号 20251007) フェニキア・カルタゴから見た古代の東地中海』、2013年、全324頁
- ② ピーター・サルウェイ(南川高志監訳)、慶應義塾大学出版会、『ローマ帝国時代のブリテン島』(オックスフォード ブリテン諸島の歴史1)、2011年、全389頁
- ③ 中野智章、泉拓良、他4名、アクティヴ KEI、『埃及考古学-ペトリーと濱田が京大エジプト資料に託した夢-』、2011年、全48頁
- ④ 泉拓良・辻村純代・小方登・佐藤育子・奥山広規・前野弘志、京都大学大学院文学研究科、『フェニキア・カルタゴ考古学から見た古代の東地中海 2009・2010年度』、2011年、全24頁
- ⑤ 泉拓良、辻村純代、奥山広規、小方登、宮坂朋、京都大学大学院文学研究科、『フェニキア・カルタゴ考古学から見た古代の東地中海 2008年度』、2010年、全16頁

〔産業財産権〕
○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/modules/special/content0018.html>

<http://www.hgeo.h.kyoto-u.ac.jp/ogata/tunisia2009/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

泉 拓良 (Izumi Takura)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：30108964

(2) 研究分担者

南川 高志 (Minamikawa Takashi)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40174099
清水 芳裕 (Shimizu Yoshihiro)
京都大学・文化財総合研究センター・教授
研究者番号：90127093
富井 眞 (Tomii Makoto)
京都大学・文化財総合研究センター・助教
研究者番号：00293845

(3) 連携研究者

岡田 保良 (Okada Yasuyoshi)
国土舘大学・イラク古代文化研究所・教授
研究者番号：70138171

宮坂 朋 (Miyasaka Tomo)
弘前大学・人文学部・教授
研究者番号：80271790
辻村 純代 (Tsujiura Sumiyo)
国士舘大学・イラク古代文化研究所・共同
研究員
研究者番号：60183480
佐藤 育子 (Sato Ikuko)
日本女子大学・文学部・学術研究員
研究者番号：80459940
宇野 隆夫 (Uno Takao)
国際日本文化研究センター・研究部・教授
研究者番号：70138171

(4) 研究協力者

小方 登 (Ogata Noboru)
京都大学・大学院人間・環境学研究科・
教授
前野 弘志 (Maeno Hiroshi)
広島大学・大学院文学研究科・准教授
西山 要一 (Nishiyama Yoichi)
奈良大学・文学部・教授
奥山 広規 (Okuyana Hiroki)
広島大学・大学院文学研究科・博士課程院
生
斉藤 努 (Saito Tsutomu)
国立歴史民俗博物館・広報連携センター・
センター長
妹尾 裕介 (Seno Yusuke)
京都大学・大学院文学研究科・博士課程院
生